

まちの皆様インタビュー！

進修館をとっても大切に、「後に伝えたい大切な建築遺産」だとおっしゃっている手島互さんは、コミュニティを重んじ、様々な集まりに関わっていらっしゃいます。その手島さんもメンバーとなって制作された「齋藤甲馬と宮代・世界のどこにもないまちを創る」という書籍は、宮代町の初代町長・齋藤甲馬氏の生涯や功績、人柄などを、資料やインタビューを通じて客観的にまとめた名著です。今回は、この書籍の制作に関することを中心に、手島さんにお話を伺いました。

【「齋藤甲馬という人がいた」ということを伝えたい】

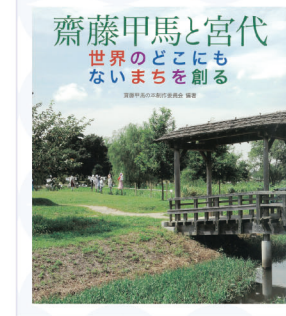
手島さんは宮代町の初代町長・齋藤甲馬さんについて、「町の体質を変えてしまうような世の中の動きには勇気をもって乗らず、宮代町の基礎をつくった人」と表現しています。1955年(昭和30年)、須賀村と百間村が合併して宮代町が誕生と同時に初代町長となり、以来1982年(昭和57年)87歳で永眠するまで27年間、宮代町長を続けられた甲馬町長は、町民を大事にして、人々のコミュニティや教育に力を入れ、その理念を基に多くの事業を実施しました。また、進修館や笠原小学校を設計した姪の富田玲子さんに、事務所の経営が立ち行かなくなった時の糧にと、ご自身が所有する春日部の土地を生前贈与していました。富田さんは、その土地の売却費用を、宮代町の人のために活かして使ってもらいたい、齋藤甲馬と宮代に関する資料を集めて後に



手島さんの仕事場の入り口に様々なジャンルの本やCD、ポスターなどがたくさん置かれているのを見ると、お話から伝わる知識の深さやその活動の幅広さが納得できます。



甲馬さんの自邸は宮代町郷土資料館に残されています。この敷地内でキャンベルというブドウを栽培して農家に広めたことで、宮代町がブドウの産地となったそうです。



お話を伺った手島互さんが制作委員を務めた本！ 詳細は進修館HP・公式LINE等でお知らせします。
「齋藤甲馬と宮代・世界のどこにもないまちを創る」を進修館窓口でも販売します!!

宮代町の将来あるべき姿を常にイメージし、宮代町の体質を変えるような世の中の動きに背を向けて、町の身の丈を意識しつつ向き合い続けた齋藤甲馬町長。その生涯の生活やユニークな言動、思想は、混沌とした今の時代にも「よく生きるヒント」を含むものです。多くの資料調査や収集、甲馬さんと交流のあった多くの方々への聞き取りなどを基に2011年10月に発行された本書を、ついに進修館窓口でも販売します。

伝えたいというお気持ちを持っておられ、手島さんにも声がかかりました。様々検討した結果、書籍として残すという方針になり、2007年に編集会議を開催し、制作委員会がスタートしました。

【じっくり時間をかけて制作】

最初は1年くらいでできるかと思っていた制作作業ですが、資料集めとインタビューに時間を費やし、結果的には3年の時間がかけれ、また、完成を目前に東日本大震災が起り、発行にはさらに時間を要しました。制作委員会のメンバーは手島さんと富田さんのほか、写真家の北田英二さん、ブックデザイナーの春井裕さん、編集者の真鍋弘さん、象設計集団の向井蘭さん。手島さんと向井さんが自転車で町内をぐるぐる回ってロケハンし、北田さんが撮影する写真の下準備を行いました。またインタビューの候補者を探し、対象者をとの交渉を行いました。インタビューの時はできる限り富田さんが同席し、北田さんは折々の風景の変化を撮影するために同じところを複数回撮影するなど、取材はじっくり時間をかけて進められました。「インタビューしていると、その作業が面白くなってきた」とおっしゃる手島さん。本が出来上がる頃には甲馬さんの没後30年に近づいていました。

【「甲馬サロン」を企画開催】

こうして2011年10月に刊行されたこの本は、2000部を宮代町に寄贈して、手元に少し残し、発行と同時に記念して開



催した「甲馬サロン」を通して広報に役立てています。このサロンは甲馬さんが目指した人々のコミュニティを深め、広げることがを願って、いろいろな企画で開催、17回を数え今も継続しています。また町に寄贈された本は、郷土資料館や宮代町役場窓口などで販売されています。

【「提示」する書籍として】
手島さんがこの本を作るにあたって大切にしていたのは、「齋藤甲馬という人が宮代町にいたということを提示すること」とのことです。「客観的に提示をして、あとは読み手が様々なことを感じてほしい」「コミュニティ、自然環境、他とは違う町であることの大切さ、などそこに書かれていることからそれぞれが感じてもらえたらいいと思っている」とおっしゃっていました。

このコーナーでは、宮代町に在住・在勤・在学など宮代町に関わるの方々にお話を伺っています。

教えて、田沼さん！「進修館のあんなこと、こんなこと」第1回

このコーナーでは、進修館の建設時に宮代町役場職員として関わった田沼繁雄さんに、当時のエピソードなどを伺います。

進修館には、象設計集団が作成した設計図面の青焼きが保管されています。躯体全体を描いたものから「大ホール」などの文字やブドウ柄のガラススタイルなどの小さな物に至るまで、様々な図面がありますが、どれも手描きで温かみがあり、デッサン画のような美しさがあります。しかしながら、図面は平面で描かれているため、進修館のような複雑で大きな建築を図面だけでイメージするのはなかなか難しそう…。当時の役場の方々はどうだったのでしょうか？田沼さんに聞いてみました。

田沼さんによると、当時は図面からどんな建物ができるかを想像することが難しかったため、「一体どんなものができるんだ?」と

議員から質問が出ることもあったそうです。「それなら、事務所に模型があるそうだから見に行ってみよう」ということになり、齋藤甲馬町長や議員、役場職員で町のバスに乗り込み、新宿にあった象設計集団の事務所を訪問したのだそうです。進修館建設の担当者だった田沼さんも、もちろん同行しました。事務所に1/20サイズの大きな模型があり、それを前に設計者たちがどのような建物になるかを説明してくれました。一行は説明を受けながら、模型の中をのぞき込んだり、斬新なデザインに驚いたり…。その時撮影された写真からは、子どもが入れそうなくらい大きな模型を囲み、熱心に説明に耳を傾ける様子が見て取れます。



元宮代町役場職員・田沼繁雄さん
ひとしきり説明を受け、帰りのバスに乗り込んだとき、「なんだかよくわからないけど、すごいものができるんだね」と言っていた言葉が、田沼さんは印象に残っているそうです。「世界のどこにもないもの」として設計された進修館ならではのエピソードです。



象設計の事務所で模型を囲む一行。最前列には齋藤甲馬町長も。



模型の前で語り合う、象設計集団の富田玲子さんと田沼さん。

みやしろ町のいろいろ

◆ 進修館開館当時(1980年)の航空写真



1980年10月撮影の航空写真です。当時、進修館の北側、現在の「四季の丘」がある場所の上半分には、宮代町役場がありました。今は芝生広場とも言われていますが、当時は「広場」というより「中庭」という認識だったようです。中庭を役場と進修館で囲むような感じになっていたため、当時の設計ポイントには「北側の中庭の陰になる部分を少なくするような屋根の断面とした。」というのもあったそうです。2フロビーにたくさん光が入り込む設計になっているのも、その一環かもしれないですね。

宮代町の気になる場所を訪問したり調べたり。雑学を交えつつ宮代町のいろいろを見ました。